
キミダケノセカイ

芸熊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キミダケノセカイ

【Nコード】

N6398M

【作者名】

芸熊

【あらすじ】

あるルールに縛られた世界Role-playing World。
d。

ルールにさえ抵触する事が無ければ、どんな願いも叶う。

その世界の王は王が死ぬ度に変わる。

何もなただけ広く広い空間。

王は夢でしかRPWには行けない。

その世界で願ったことは現実世界に反映され、ルールも現実世界に反映される。

ルールを解き明かし、正しい願いをしなければこの世界からは逃れられない。

序幕↳道化のネガイ（前書き）

さあ願いの扉を開く時。

序幕　道化のネガイ

あるルールに縛られた世界Role-playing World。
ルールにさえ抵触する事が無ければ、どんな願いも叶う。

その世界の王は王が死ぬ度に変わる。

何もないただ白く広い空間。

王は夢でしかRPWには行けない。

その世界で願ったことは現実世界に反映され、ルールも現実世界に反映される。

ルールを解き明かし、正しい願いをしなければこの世界からは逃れられない。

私はPray Clown。

願いの道化。

この世界の案内人でございます。

あなた方の願いをお聞かせください。

序幕↳道化のネガイ（後書き）

アナタの“願い”は？

佐倉のネガイ1（前書き）

1つめの願いの扉は一人の男性が開けた。

佐倉のネガイ1

「ったく、あのくそタヌキ。俺に全責任押し付けやがって。お前の指示通りにしたのに、責任全部擦り付けて保身かよ。」

真つ暗な道を、顔を赤くした男が歩いている。

彼の名前は佐倉。

普通の青春時代を過ごし、普通の大学を出て、普通の会社に就職したサラリーマンだ。

「なんか良いこと無いかな。はあ、明日休みだし帰ったらヘルスでも呼ぶか。」

彼は独り言を呟きながら、街灯の灯りが少ない夜の帰路を進んだ。半ば自棄で呑み続けたため、時間は既に0時を回っている。

彼の家は閑静な住宅街に佇む独り暮らし用のマンション。

当然、帰路に有る周辺の家には電気はあまり灯っていない。

街灯と僅かにまだ起きている家庭の灯りを頼りに佐倉はようやく家についた。

「さて、もう一杯飲んでヘルスのネエチャンとイチヤイチャしますか。」

ネクタイを外しシャツを脱ぎながら冷蔵庫からビールと肴を取り出す。

彼はビールと肴をテーブルに置き、着替えを進めジャージにTシャツと言う出で立ちでベッドに腰かけた。

ワンルームで10畳程の部屋はベッド、テーブル、冷蔵庫、パソコンデスクで埋められている。

大学当時から付き合っていた恋人と寝る為に、ベッドをキングサイズにしたため酷くバランスが悪い配置だ。

しかしその恋人も入社して3ヶ月程で別れ、ベッドの広さは既に無用の長物と化していた。

佐倉は飲みかけのビールをテーブルに置き、ゴロリとベッドに寝転がり天井をボーッと眺めている。

「入社してから、もう3年目か。あのタヌキの下でよく保ってるな、俺。」

「なんか良いこと無いかな。」
そう呟くと彼は眠りについていた。

佐倉のネガイ1（後書き）

彼の願いは…？

佐倉のネガイ2（前書き）

願いの扉の中の世界。ただ白く自分が存在するだけの世界。

佐倉のネガイ2

“眩しい、なんだココ”

飛び起きた佐倉は真つ白な世界に存在していた。

「ようこそ“願い”の世界『ロールプレイングワールド』へ。私は貴方の案内を致しますプレイク라운、願いの道化でございます。そうですね、道化とでもお呼びください。」

今の自分の状況、いきなり目の前に現れた巨躯のピエロ、何も無い白い世界に佐倉は混乱していた。

「どうなさいました。ここは貴方が願い、貴方が開けた扉の向こう側の世界ですよ。」

身長が2メートルを超えるであろう道化を佐倉は睨み付けた。

「ここはどこだ。」

「先ほど申しましたように『Role - playing World』願いの世界でございます」

「夢か。」

「そうですね。夢ではありますが、現実でもある。貴方の願いを現実に叶える、夢と現実の狭間に在る世界と言ったところでしょいか。」

“夢、現実、願い、なんだそれ。意味が解らない。酒呑みすぎて頭がおかしくなったのか。”

「そんな事はございません。失礼、私には思っていることを覗ける権限があるため嘘は通用しません。この世界の事をかいつまんで説明致しますよう。」

巨躯のピエロは朗々と歌うようにRPWの説明を始めた。

この世界にはルールが有ること、そのルールに抵触しなければ願いが叶うこと、ルールは自ら考察しなければならぬこと、ルールを願いで変えることは出来ない事などを語っていった。

「なるほど、本当に願いは叶うのか。」

「もちろんでございます。ルールに則っていれば、と言う条件付きではございますが。」

「なら、証拠を見せる。」

「畏まりました。では“願い”を私にお聞かせください」

「そうだな、まずは本当かどうか確かめる為だ。軽い願いから行こう。俺の冷蔵庫にビールと肴が絶えないようにしろ。」

「確かに聞き届けました。では、信じていただけるよう貴方を現実世界へ送りましょう。また貴方が願い眠れば、この世界の扉は開かれます。なんせ貴方はこの世界の王でございます。いつでもお越しください。」

道化は佐倉の手を取り、白い世界のどこかに有ったドアを開けた。

「こちらから貴方の世界へ戻れます。またこの世界にやってくることをお待ちしております。では。」

佐倉のネガイ2（後書き）

思いの力。それを具現化する世界。

佐倉のネガイ3

ふと頭痛に見舞われ佐倉は目を覚ました。
非現実的な世界から彼は自分の部屋に戻ってきていた。

時間を確認すると午前5時を回っていた。

「ああ、もう5時か。寝ちまったな。ヘルス呼ぶ時間でもないしビールでも…」

彼はベッドから立ち上がり冷蔵庫を開け、手を止めた。

「あの夢、マジかよ。」

彼の冷蔵庫の中にはビールが3本、肴が1パック入っていた。

ビール3本と言うのは、彼が普段帰ってきて呑む本数だ。

ほぼ毎日、肴1パックとビール3本を消費している。

“いや、まだ信じれる訳じゃない。たまたま俺が買ってて忘れたんじゃないのか。”

彼は「絶えないようにしろ」と願ったのだ。

もちろん1日分では解らない。

しかし、それは1週間続いた。

その間、佐倉は一度もビールは買っていなかった。

「そうか、本物か。流石に1週間続いたら信じざるを得んわな。ははっ。はははははは」

彼は自分の頭がおかしくなったと思ったのか、願いを叶えられる喜びからか、ひたすら笑い転げた。

隣人が流石にうるさく感じ怒鳴り込んでくるまで笑い続けた。

「そうか、願いが叶うのか。あのピエロ“願い眠れば”って言うてたな。よし、次は〳〵でも願ってみるか」

そう呟いた後、彼はビールをグイと飲み干しベッドに横になった。
願いが叶うかもしれない、と言う興奮から彼はなかなか寝付けず、暗い部屋を眺めていた。

2年も前に別れた恋人の事を思い出したり、仕事について考えたり

していると、急に白い世界はやってきた。

「お帰りなさいませ、佐倉様。この世界へ戻ってきたと言っことは信じていただけましたかな。」

佐倉のネガイ3（後書き）

次の願いの世界へ

川嶋のネガイ1（前書き）

物語は新しい扉が開かれる

川嶋のネガイ1

しとしと降り続く雨。

その中を暗い顔をしてビニール傘を差した高校生が歩いている。

「川嶋ー。一緒に帰ろう。」

後ろから声をかけながら一人の青年が走り寄ってきた。

川嶋と呼ばれた高校生と同じ制服を着ている。

「あ、木下。うん、いいよ。一緒に帰ろう。」

木下と呼ばれた青年は背が高く、精悍な顔つきをした短髪の青年だが、川嶋は木下とは似ても似つかない。

身長も170センチほどで髪が長く、表情も暗い。

「どうしたんだ。随分暗い顔してるな。」

「うん、テストの点が悪くてさ。また親に怒られると思うと、ね。」

「お前がそんなに悪いわけないだろ。何点だった。」

川嶋は立ち止まり、鞆を漁って一枚の紙を出した。

「ん。」

川嶋から木下に突き出された紙には87以下の点数は書かれていない。

87点と言うのも1教科のみで、他は全て90点台の点数だ。

「この点数で怒られるって、ホントお前んちの親厳しいよなあ。医者にでもしたいんだろうな。」

「いや、弁護士だよ。うちの両親二人共検事あがりの弁護士だし。」

「ほう、そうなのか。」

「はあ。」

川嶋は一つ溜め息をつくとき空を見上げた。

「なんか良いことないかなあ。いつそ雨に溶けてしまいたい気分だよ。」

「まあ、そのうちあるだろ。良いこと。」

「だと良いね。」

「だから、ほら。背中丸めて暗い顔してないで、背筋伸ばして笑え。」

木下は川嶋の背中を叩き顔を覗き込んでニツコリ笑った。

「そうだね。木下は何点だったの。」

「それは聞くな。」

そんなやり取りをしていると、いつのまにか川嶋の家の前に到着していた。

「それじゃ、また夏休み中でも遊ぼうや。」

そう言い残し木下は去って行き、川嶋は玄関の前で傘をたたみ、少しの間佇んでいた。

「このまま、どっかに飛んでいきたいな。」

ポツリと呟くと意を決したのか、ドアを開け家の中へ入っていった。

「お前は何度言えば解るんだ。全て90点以上を取ってこいといつも言ってるだろう。」

低く、脅すように、諭すように川嶋の父が言った。

川嶋は血の気の引いた怯えた表情で、一言だけ返した。

「ごめんなさい。」

「まったく、なぜこんな問題で90点も取れん。今日は夕飯を食べたら3時間以上は復習をしろ。解ったな。」

「はい。」

その後間もなく食卓に夕飯が並べられた。

父親からの小言により夕飯をゆっくり食べる暇もなく部屋へと戻った。

ギシツと音を立て椅子に座り、机の中からテスト問題を取り出す。テスト問題を机に並べ、ノートに問題と答えを書き写す。

その作業は全ての問題がミス無く解けるまで続いた。

作業が終わり、ふと時計を見ると短針は2時を指している。

どつと疲れが増し、ベッドに寝転がると溜め息が自然と漏れた。

「はぁ。なんか良いことないかなぁ。」

川嶋のネガイ1（後書き）

川嶋のネガイ

川嶋のネガイ2

「ようこそ、願いの世界『ロールプレイングワールド』へ。案内は私、プレイク라운願いの道化でございます。以後お見知り置きを」いきなり現れた執事のような出で立ちの男に声をかけられ川嶋はひどくおどろいていた。

「えっ、と。なんですか。」

「だーからー、ようこそRole-playing Worldへ。俺は願いの道化。好きなように呼んで。」

身長は川嶋より少し高いくらいだろうか。

痩身でハットを被り、紳士然と振る舞おうとしていたが、なかなか上手く振る舞えず諦めたようだ。

「え、あ、はあ。」

自分を道化と呼んだ男は川嶋の反応を見て明らかにつまらなそうな顔をした。

「で、なんか願いあるんでしょ。俺に言えば叶えるよ。」

「いや、あの、その前に。ここ、どこですか。え、夢なのか。」

周囲が白く、影も写らない不思議な空間に川嶋は戸惑っている。

道化は川嶋の反応を見てニヤリと笑った。

「いいねえ。そういう反応。うん、ここは願いが叶う世界。夢じゃないけど現実でもない。ここで願えば現実に叶えられるってワケ。ルールは有るけど、それに逆らわなければどんな願いも叶う。」

「へえ。そのルールって…」

川嶋の質問を遮り道化が先に答える。

「ルールは教えられない。すまないね。あ、そうそう。俺には君の考えていることを覗ける権利がある。だから嘘はつくなよ。」

川嶋は道化の言うことが俄に信じがたく、ふと試してみることにした。

“ 本当か。 ”

「本当か。」

“僕を騙そうとして嘘を言ってるんじゃない？”

「僕を騙そうとして嘘を言ってるんじゃない？」

「解りました、信じますよ。」

「ん、素直でよろしい。」

道化は笑顔で川嶋の頭を撫でた。

川嶋は願いよりも先に白い世界を散歩してみようと立ち上がった。しかし、床に足が付いた感覚がない。

「あ、あぶない待って。」

道化が注意を促すと同時に川嶋は転んでいた。

いや、正確には転んだと言う概念はないが。

「ここは願い、つまり思いの世界だから床も思いを込めて踏まないと今みたいになる。ヤバいとこの世界に飲まれるよ。」

無意識に行っている行動は全て意識しなければ危険になるようだ。

「解りました。」

転ばないように川嶋は思いを込めて空間を踏んだ。

次は難なく立てた。

「ふう。少し歩こうかと思いましたが、疲れました。願いも思い付かないんで現実に帰りたいんですが。」

「ん、良いよ。この世界には君しか来れない。この世界に来たいと願いながら眠れば、また来れる。」

そう説明しながら道化は空間の何処からジッパーを見つけ、それを開けた。

「ここから帰れる。気を付けて帰りな。」

道化は優しい笑みを浮かべ、川嶋の手を取った。

そしてそのままジッパーの間に向けて

川嶋を放り投げた。

「うわっ。なにすんだこの道化！」

と叫びながら川嶋は空間の中に消えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6398m/>

キミダケノセカイ

2010年10月11日18時03分発行